「Die Brücke 架け橋」第734号 令和６年２月１日発行（隔月刊）公益財団法人日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

Die Brücke 架け橋

日独協会機関誌

2024 2

表紙の言葉

今年 2024 年は、ベルリンと東京の友好都市提携 30 周年の記念の年です。そこで、今年は Die Brücke の表紙でも、「ベルリンの今」や「東京とベルリンの交流」をテーマにした写真を掲載していく予定です。

今回の表紙の写真は日独協会のドイツ語講座教師でベルリン在住の本田恵理先生に送っていただきました。写真に写っているのは、ベルリンの南東部、ケーペニック地区にある古い工場跡地内で開催されたクリスマスマーケットの様子です。1900 年前後、ここには発電所、ケーブル工場、自動車工場などが集まっていました。現在では工場としての役割を終えたこれらの建物ですが、今でもイベント会場やミュージアムとして使われています。ドイツを歩いていると、古い建物が用途を変えて今も現役で活躍している風景に出会うことがよくあります。それもドイツの街歩きの楽しみかもしれません。

菊池菜穂子

Zum Titelbild

Dieses Jahr feiern wir das 30-jährige Bestehen der Städtepartnerschaft zwischen Berlin und Tokyo. Darum haben wir vor, Bilder mit dem Thema „Berlin heute“ und „Austausch zwischen Tokyo und Berlin“ als Titelbilder der diesjährigen „Die Brücke“ Ausgaben zu verwenden.
Das Titelbild dieser Ausgabe wurde uns von Frau Eri Honda zugeschickt, die Deutschkurse bei der JDG unterrichtet und in Berlin wohnt. Auf dem Bild ist ein Weihnachtsmarkt zu sehen, der sich in den Überresten einer alten Fabrik im Stadtteil Köpenick im südöstlichen Teil Berlins befindet. Um das Jahr 1900 befanden sich dort unter anderem Kraftwerke, Kabel- und Autofabriken. Die Gebäude haben heute als Fabriken ausgedient und werden als Veranstaltungsorte oder Museen verwendet. Wenn man in Deutschland spazieren geht, trifft man oft auf solche alten Gebäude, deren Verwendungszweck sich geändert hat und die noch aktiv genutzt werden. Auch das ist wohl eine der Freuden von Spaziergängen durch deutsche Städte.

Nahoko Kikuchi

目　次　　ページ／ Seite　　INHALT

新年のご挨拶	クレーメンス・フォン・ゲッツェ	1	**Grußwort zum Neujahr**	Dr. Clemens von Goetze
11 月 12 月の協会活動報告		2	**JDG-Aktivitäten im November und Dezember**	
ベルリン独日協会へのインタビュー		7	**Interview mit Frau Dr. Verena Materna von der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Berlin**	
特別寄稿 1 ：ドイツと日本の環境意識	木下 信行	9	**Beitrag 1: Umweltbewusstsein in Deutschland und Japan**	Nobuyuki Kinoshita
シリーズ：ドイツの鉄道「鉄道を通じて振り返るイリス商会の功績　その 2」	久保 健	10	**Serie: Die deutschen Bahnen und Züge „Die Leistungen der C. ILLIES & CO. HANDELSGESELLSCHAFT im Bereich der Eisenbahnen“, Teil 2**	Ken Kubo
ダヴィのコーナー かも？：京都と東京の生活	ダヴィット・マイヤー	11	**Kolumne des Praktikanten: Mein Leben in Kyoto und Tokyo**	David Meier
ドイツ経済の動き　第 85 回	伊﨑 捷治	12	**Tendenz der deutschen Wirtschaft (85)**	Shoji Isaki
特別寄稿２：南砺市いなみ国際木彫キャンプにボランティアとして参加して	日南田 美幸	13	**Beitrag 2: „Inami International Wooden Sculpture Camp“ in der Stadt Nanto**	Miyuki Hinata

Grußwort zum Neujahr
Dr. Clemens von Goetze
Botschafter der Bundesrepublik Deutschland

新年のご挨拶
クレーメンス・フォン・ゲッツェ
駐日ドイツ連邦共和国大使

©dpa_Jutrczenka

読者のみなさまへ

年の初めは、過ぎ去った年を振り返り、新年の抱負を思う良い機会です。ロシアによるウクライナ侵略戦争や中東地域で繰り広げられる凄惨な光景など、2023年は多事多難で、しばしば震慄を禁じえない一年となりました。2024年も、元旦に石川県能登半島一帯を大地震が襲い、多くの人命が失われました。この状況には心が痛むばかりです。

こうした困難な時にあっても、日本とドイツの関係はより一層緊密なものとなり、政治、経済、文化、科学など、さまざまな分野において絆がさらに深まっています。新型コロナウィルス感染症対策が緩和されたことで、対面交流の機会も増えました。

昨年は政府や自治体のレベルでも数多くの相互訪問が行われました。これは、日独双方にとって対面交流の再開がいかに有益かを示すものです。ショルツ首相が６名の閣僚と経済界代表団を伴って東京を訪問し、第１回日独政府間協議が開催されたのはその一例です。ここでは、基本的価値を共有するパートナーとして、今後、両国が手を携えてレジリエンスをいかに強化していくかなどが話し合われました。

市民社会のレベルにおいても有意義な交流が活発に行われました。３月には新潟日独協会との意見交換、10月には名古屋日独協会創立70周年記念行事「ドイツと日本－共に21世紀の課題に立ち向かう」、若い世代の多くの方々と共に大使公邸で祝った日独協会夏祭り、全国日独協会連合会年次総会とそれに続けて公邸で開催されたレセプションなど、枚挙にいとまがありません。また、「ドイツフェスティバル」では３万人の来場者とともに日独の良好な友好関係を祝いました。

2023年、日本はG7議長国として、グローバルな課題に対する国際的取り組みを大きく前進させるべく、素晴らしい役割を果たしました。ドイツと日本はG7においても、先進国のリーダーという重要な責務を担ったのです。日独両国は連携し、化石燃料からの脱却と再生可能エネルギーへの転換に向け、意欲的に取り組んでいます。ここでは、日独両国が備えるイノベーションの力と、「日独エネルギーパートナーシップ」の枠組みにおいて実施される水素社会やエネルギー転換の実現に向けた対話を礎とします。

中東地域における紛争はもちろんのこと、ロシアによるウクライナ侵略戦争、そして、緊張の高まるインド太平洋地域における連携など、現在私たちが直面している地政学的な問題や危機も、両国の対話において議題となりました。

こうした困難な時代にあって、日本とドイツがあらゆる分野で協力関係を深めていること、そして、相互に信頼し合える関係であるという確信は、貴重な財産です。この確信があるからこそ、私は2024年に向けて大きな希望を抱くことができます。

また、今年30周年を迎える東京ベルリン友好都市提携の記念行事も楽しみでなりません。

みなさまにとりまして、本年が希望に満ちた素晴らしい一年となりますよう、また、辰という干支がもたらす力強さと幸運に恵まれ、成功に満ちた一年となりますよう、心よりご祈念いたします。

駐日ドイツ連邦共和国大使
クレーメンス・フォン・ゲッツェ

Liebe Leserinnen und Leser,

der Jahreswechsel gibt uns die Gelegenheit, Erfahrungen der vergangenen Monate zu reflektieren und gute Vorsätze für die Zukunft zu fassen. Das Jahr 2023 war ein ereignisreiches, oft sogar erschütterndes Jahr, wenn wir beispielsweise an den russischen Angriffskrieg gegen die Ukraine und die furchtbaren Bilder aus dem Nahen Osten denken. Und auch das Jahr 2024 startete in Japan denkbar dramatisch mit dem Erdbeben auf der Noto-Halbinsel in Ishikawa. Viele Menschenleben waren ausgerechnet am Neujahrstag zu beklagen.
Aber Deutschland und Japan sind in diesen schwierigen Zeiten enger zusammengerückt. Wir haben unsere politischen, wirtschaftlichen, kulturellen und wissenschaftlichen Bindungen weiter gestärkt. Die Aufhebung der Corona-Restriktionen hat auch wieder viel mehr Möglichkeiten für persönliche Begegnungen eröffnet.
Wie sehr wir von der wiedergegebenen Möglichkeit der persönlichen Begegnung auch im Kontext der deutsch-japanischen Beziehungen profitierten, davon zeugten die zahlreichen bilateralen Besuche auf regierungs- als auch auf kommunalpolitischer Ebene, die 2023 stattfanden. So kam Bundeskanzler Scholz gemeinsam mit sechs Ministerinnen und Ministern der Bundesregierung und einer Wirtschaftsdelegation nach Tokyo, um die ersten deutsch-japanischen Regierungskonsultationen zu führen und sich unter Wertepartnern u.a. darüber auszutauschen, wie sich in Zukunft die gemeinsame Resilienz erhöhen lässt.
Auch auf gesellschaftlicher Ebene kam es zu vielen wertvollen Begegnungen. Hierzu zählen der Austausch mit der IDG Niigata im März, die Veranstaltung „Deutschland und Japan - Gemeinsam den Herausforderungen des 21. Jahrhunderts begegnen“ zum 70-jährigen Bestehen der IDG Nagoya im Oktober, das IDG-Sommerfest mit vielen jungen Mitgliedern, sowie die IDG-Generalversammlung mit anschließendem Empfang in meiner Residenz. Auf dem „Deutschlandfest“ feierten wir mit 30.000 Besuchern und Besucherinnen die deutsch-japanische Freundschaft.
2023 war das Jahr der erfolgreichen G7-Präsidentschaft Japans, welche die internationale Arbeit an globalen Fragestellungen merklich voranbrachte. Als führenden Industrienationen kam Deutschland und Japan auch in diesem Rahmen eine besondere Verantwortung zu. Gemeinsam arbeiten wir engagiert an der Abkehr von fossilen und am Umstieg auf erneuerbare Energien. Dabei setzen wir auf unsere Innovationskraft und unseren Austausch im Rahmen der japanisch-deutschen Energiepartnerschaft, unter anderem über Wasserstoff und Energietransformation.
Auf der Agenda standen auch die aktuellen geopolitischen Themen und Krisen, wie natürlich der Konflikt im Nahen Osten, aber auch der russische Angriffskrieg in der Ukraine und die Zusammenarbeit im Indopazifik, wo die Spannungen zunehmen.
Im Angesicht dieser schwierigen Zeiten sind die in allen Bereichen wachsende Kooperation zwischen Japan und Deutschland und die Überzeugung, sich auf den anderen verlassen zu können, ein kostbares Gut. Das erfüllt mich mit großer Zuversicht für das Jahr 2024.
Zudem blicken wir 2024 mit Vorfreude auf das Städtepartnerschaftsjubiläum von Tokyo und Berlin, welche in diesem Jahr ihr 30-jähriges Bestehen feiern wird.
Ich wünsche Ihnen allen einen guten und hoffnungsvollen Start in das neue Jahr, welches unter dem traditionellen Tierkreiszeichen des Drachen Stärke, Glück und Erfolg verspricht!

Mit freundlichen Grüßen
Dr. Clemens von Goetze
Botschafter der Bundesrepublik Deutschland

レポート

2023 年クリスマスの集い

日時：2023 年 12 月 1 日㈮　19：00 ～ 21：00
会場：日立目白クラブ
（東京都新宿区下落合 2-13-28）

柚岡 一明（日独協会 常務理事）

2023 年のクリスマスの集いは、東原会長のご厚意により「日立目白クラブ」をお借りしました。この建物は、学習院高等科（旧制）の寄宿舎として、東京都庭園美術館も手がけた宮内省内匠寮が設計したものです。スパニッシュ様式とアールデコ様式が見事に融和した建物は 往時の面影を色濃く残しており、素晴らしい雰囲気の中でフォン・ゲッツェ駐日ドイツ大使ご夫妻をはじめとする約 100 名の日独関係者が集い、大変盛況となりました。

クリスマスソングを全員で合唱

司会は当協会の研修生ダヴィット･マイヤーさんと、ユースネットワーク会員の司徒友依さんにお願いしました。お二人とも上手に進行してくださいました。また余興として当協会の若手会員の丸山菜苗さんに素晴らしいピアノ演奏を披露していただきました。

集いではまず東原敏昭会長がご挨拶されました。東原会長は、経済、安全保障、文化交流など、社会の様々な領域で日独関係が一層緊密化していることを指摘しました。特に 10 月には経団連がドイツを訪問し、東原会長はロベルト･ハーベック副首相兼経済･気候保護大臣やフォルカー･ヴィッシング デジタル･交通大臣と意見交換を行ったことを紹介しました。

現在ドイツでは、環境問題への取り組みが第二のイノベーションの源泉となっていることを説明し、ドイツと日本が連携し、気候変動や環境問題に対する国際社会の責任を明確にすることで世界のルール作りを主導することが期待され、それには日独の若い人達が積極的にイノベーションに取り組むことが重要であると述べられました。会長はフォン・ゲッツェ大使が昨年の「夏祭り」に多くの若者を招待して下さったこと、また日独協会の活動に対してご理解とご支援頂いていることにも感謝の意を表されました。

また、2024 年は東京とベルリンの友好都市提携 30 周年であり、日独協会としても大いに寄与したいと言及しました。

続いて、フォン･ゲッツェ大使がご挨拶されました。大使は、2022 年からの国際地政学的緊張の高まりとともに、日独関係が一層に密接化していること、G7 で日本がドイツから議長国を引き継ぎ、日独が共通してインド太平洋の安全といった課題に取り組んでいることを評価されました。経済面では東原会長も参加された経団連のドイツ訪問と意見交換は有意義であったこと述べられ、最後に、日独交流に対する日独協会の貢献に感謝したい、と結ばれました。

フォン・ゲッツェ大使

八木毅副会長に乾杯の音頭をいただいた後は食事と歓談の時間となりました。第二部はクリスマスソングの合唱で始まりました。指揮は上野弥生理事、伴奏は丸山さんが務められました。続いて丸山さんによるミニコンサートがあり、メンデルスゾーン／無言歌集より Op. 102-5「子供の小品（クリスマスの小品）」、Op. 67-4「紡ぎ歌」や、シューマン／「ミルテの花」より Op.25「献呈」を演奏いただきました。

歓談タイム

丸山菜苗さんによるミニコンサート

ムードが高まったところで、毎回好評の福引抽選会を開催しました。時間の都合もあり、皆様の前では、株式会社日立製作所ご提供の高性能炊飯器とブレンダー、富士フイルムホールディング株式会社ご提供のインスタントカメラとフィルム、一般財団法人日本玩具文化財団ご提供のシュタイフ社の「テディベアフィンチ」と「スーツケーステディベアアンドミラのペン」、レストラン Blauer Engel のお食事券さらに大坂靖彦様ご提供の貴腐ワインの福引のみが行われました。当選者の名前が呼ばれるたびに会場がどよめき、興奮も最高潮となりました。賞品をご提供頂きましたすべての皆様のお名前が司会者からご紹介されました。

東原会長とフォン・ゲッツェ大使ご夫妻には最後まで多くの皆さんと懇談いただき、心より感謝申し上げます。長時間にわたり大使ご夫妻と会員の交流の橋渡しを頂きました通訳のフォン・デア・オステン様にも心より御礼申し上げます。そして、何よりもクリスマスの集いを楽しみにしてくださった参加者や、お手伝いくださった関係者の皆様、集いにご協力、ご寄贈をいただいた法人会員企業や個人会員の皆様に心より感謝申し上げます。

東山会長から､炊飯器を受け取る当選者

ご協力頂きました皆様（敬称略・順不同）

ドイツ連邦共和国大使館 / ㈱日立製作所
富士フイルムホールディングス㈱ / 一般財団法人日本玩具文化財団
エア・ウォーターアグリ＆フーズ㈱
㈱ NRW ジャパン / SKW イーストアジア
日本緑茶センター㈱ / ㈲伏見ワインビジネスコンサルティング
ワインハウスゲアハルト㈱
ドイツ・オーストリア料理 Blauer Engel
㈱白水社 / 大坂 靖彦 / 井上 壽博 / 林 良雄 / 吉岡 美千子

ドイツ語講習会
2023 年度下半期コース
火～日曜日
Deutschkurse in der JDG
Oktober 2023 - März 2024
jeden Di.-So.

ドイツフェスティバル参加
11/3 ㈮　11:00 ～ 18:00
都立青山公園
Teilnahme an „Doitsufestival“
Datum: Fr., 3. 11. 23, 11.00-18.00
Ort: Aoyama Park

協会ブースの様子

3 年ぶりに都立青山公園で開催されたドイツフェスティバルに、協会も 1 日だけブースを借りて参加しました。このフェスティバルでは、ドイツビール、ワインや料理の他に、ドイツ製品も売られていました。ステージでは音楽プログラムがあり、ビールジョッキ持ち上げ競争や参加型のプログラムもありました。良い天気で多くの人がフェスティバルを楽しんでいました。

日独協会のブースでは訪れた人の名前をドイツ語にするというサービスを行いました。その際、スタッフは名前に使われている漢字の意味や名前に込められた願いなどを聞いて、なるべくかっこいいドイツ語に訳しました。外国の名前は、そのお名前に適当な漢字を探して日本語にしました。そして、その名前を協会オリジナルのポストカードに書いてお渡ししました。名前を作り上げることが楽しく、お客さんにも喜んでもらえました。一日中たくさんのお客さんが来てくれて、用意していたポストカードは全て無くなってしまいました。　（ダヴィット・マイヤー）

ドイツ語圏文化セミナー 156　ベルリンで暮らす、働く～ソフトウェアエンジニアの現地就職事情～
11/10 ㈮　19:00 ～ 21:00
日独協会事務所内セミナールーム
Seminar 156 : Leben und Arbeiten in Berlin - Ein Software-Ingenieur berichtet über die aktuellsten Arbeitsmöglichkeiten
Datum: Fr., 10. 11. 23, 19.00-21.00
Ort: Seminarraum der JDG

参加者 25 名。今回登壇頂いた所親宏さんは最初からドイツに関心があったわけではありません。海外移住の夢をかなえるべく情報を収集し、比較検討した結果、ドイツを選び、現在はベルリンにあるスタートアップ企業でソフトウェアエンジニアとして働き、奥様とふたりのお子さんと暮らされています。当協会では、例えばキャリアセミナーなら、ドイツで就職するにはどうすれば良いかといった「ドイツありき」の観点で開催してきましたが、今回、所さんから海外の他都市との比較や現在進行形のリアルで鮮度の高い情報を聞けたことで、客観的な視点でドイツを見ることができ、参考になることが多かったです。ドイツは連邦国家で州によって法律や制度が異なりますので、ひとくくりにすることはできないですが、少なくともダイバーシティを推進する取り組みが活発なベルリンが海外移住先として大きな可能性を秘めた都市であることは間違いないようです。

講師の所親宏さん

当日は、熱量の高い質疑応答や参加者同士の情報交換、交流がセミナー終了後も活発に繰り広げられ、アンケートの回答からも「定量的な比較はとても納得感があり、より具体的なイメージができた。」「働く上での情報、心理的な準備、制度自体の違いなど、とても参考になった。」「ソフトウェアエンジニアに関わる日米独の比較が聞けたのが面白かった。日本だと日米ばかりだから。」など、参加した方からの本気度と満足度が伝わってきました。（宮本 周子）

ドイツの詩をドイツ語で朗読する集い　第 2 回
11/14 ㈫　16:00 ～ 18:00
ベヒシュタイン・セントラム東京
Lesung deutscher Gedichte
Datum: Di., 14. 11. 23, 16.00-18.00
Ort: C. Bechstein Centrum Tokyo

主催者の藤田明先生と参加者たち

主催者の藤田明先生（聖学院大学名誉教授）を含めて 10 名の方が 14 のドイツリートを朗読されました。聞き手も 30 名が参加、ドイツリートの魅力に酔いました。ドイツリートは、詩の内容や韻律に忠実に音楽がつけられているので、詩を朗読することで、音楽の表現力や効果をより感じることができ、今回もドイツ語の美しさや豊かさを堪能できる機会となりました。

朗読した詩の内容は自然（Auf dem Wasser zu singen / Im Rhein, im heiligen Strome）や恋愛（Sei mir gegrüsst / Ich grolle nicht）など多彩でロマンチックなものが多く、詩の朗読で、詩の意味やメッセージをより深く理解することができました。

ドイツリートを朗読することで、ドイツの詩と音楽と文化と歴史を総合的に学ぶことができます。聴くだけでも楽しいですが、朗読することで、その魅力はさらに増します。次回も多く方の参加を期待しています。（柚岡 一明）

ドイツ時事問題研究会 第 93 回
11/18 ㈯　15:00 ～ 17:00
Studiengruppe "Deutschland aktuell" (93)
Datum: Sa., 18. 11. 23, 15.00-17.00

当月のトピックスは、①連邦と州が亡命申請者（難民）に対する給付の実質的引き下げなど流入抑制策で合意。②連邦と州が送電網、住宅、道路建設などの計画、認可、実施手続きの簡素化で合意。③左派党を離党した女性議員が設立を計画する新党が一挙に 14% の支持率。④ザクセン・アンハルト州憲法擁護庁が AfD 同州支部を反

民主主義極右勢力に指定して、監視を強化。⑤各地で起きる反イスラエル・デモ、反ユダヤ犯罪、などについて報告し、意見交換を行った。

「今月のテーマ」では、「支持率が上昇する極右政党 AfD の政策と支持者 ～ドイツ国民は右傾化したか？～」と題して、① AfD 支持者の多くが自らの利益に反する政策を掲げる政党（AfD）に投票している、② AfD に対する支持は連邦政府の難民政策等に対する批判を反映したもの、③国民に右傾化の傾向はみられない、など調査機関の見解を紹介し、活発な質疑応答を行った。（伊﨑 捷治）

シュプラッハトレッフ（日独言語交換会）

11/18 ㈯　19:00 ～ 20:40

Sprachtreff

Datum: Sa., 18. 11 23, 19.00-20.40

参加者 32 人。今回はグループ構成が特に大変でした。申し込んだ方の人数が多かったので、最初は 6 人グループにするしかないと思いましたが、いくつかのキャンセル連絡が来て、モデレーターもたくさん手伝ってくれましたので最終的には 1 グループ大体 4 人にすることが可能になりました。残念ながら、連絡のない欠席もありました。

初級のグループのために準備したテーマは「クリスマスマーケット」でした。アンケートでは「優しい雰囲気でシュプラッハトレッフを楽しめました」、「小グループで話す機会も他の方の話を聞く機会もあって、ドイツ語と日本語の混合がちょうどよかったです」、「参加者が優しくてよく会話できました」等のポジティブな意見をいただきました。一方で「相手が速く話すと分からなくなるのでゆっくり話して欲しい」のような希望もありました。ドイツ側の参加者からは「もっと話したい。1 時間半の交流時間は短い」といった意見がありました。（ダヴィット・マイヤー）

独逸塾

11/20 ㈪　19:00 ～ 21:00

Gesprächskreis: Neuigkeiten aus Deutschland

Datum: Mo., 20. 11. 23, 19.00-21.00

参加人数 25 名。

1. テキスト 2023 年 6 月 4 日 Deusche Welle より „EU-Parlament bringt Regeln für KI auf den Weg“

1）欧州委員会が人工知能の規制の検討を始め、透明性を確保したヨーロッパスタンダードの確立をめざしている。人工知能の発展が急速であるため法律でなく付属文書で規定して行く予定。TÜV のような独立機関による認定書の交付も検討されている。

2. テキスト 2023 年 4 月 1 日 ZDF Heute „Wie gefährlich ist KI, wenn man den Bot ChatGPT fragt?“

1) 人工知能が急速に発展し将来人間を超え、人間が劣った種とみなされる時代が来ることが恐れられている。また多くのデータが悪用される恐れがある。したがって人工知能は慎重に発展させ、管理する必要がある。

3. テキスト 2023 年 8 月 5 日 Spiegel 誌より „Extrem Verharmlost“。シュピーゲルの記者による、ドイツの反 EU、反移民、反グロバリゼーション政党 AfD への批判記事

1）AfD はますます公然と反移民、反 EU を打ち出している。AfD 内の穏健派は発言権を失い党は過激化している。世論調査でも 20％の支持率を確保しているが、支持層にとって AfD の極端な右翼思想は気にならないように思える。

2）移民問題、コロナ危機、エネルギー危機を含むウクライナ戦争、所得格差の拡大といった社会の不安が過激な右翼の AfD に利益をもたらしている。

In die Hände spielen 等、ドイツ語の表現をめぐり活発な議論があった。（森永 成一郎）

ドイツ語圏文化セミナー 157：ドイツ・オーストリアの秋の味覚 フェーダーヴァイサー / シュトルムを味わおう 7

11/23 ㈭　15:00 ～ 16:30

Glocal Point Aoyama

Seminar 157 : Neuer Wein, alte Tradition -Federweißer stürmt Tokyo-

Datum: Do., 23. 11. 23, 15.00-16.30

Ort: Glocal Point Aoyama

試飲しながら交流

参加者 36 人。外苑前にある Glocal Point Aoyama をお借りして、フェーダーヴァイサー（オーストリアではシュトゥルム）を味わうイベントを開催しました。2019 年開催時と同じ会場（当時は「グローカルカフェ」という名でした）で、その時と同じく、ドイツパンスクール「PS パパン」さんに作っていただいたツヴィーベルクーヘン（玉ねぎのキッシュのようなパン）とドイツパンのセットをいただきながらの試飲会でしたので、ようやくコロナ禍を脱して前と同じようにイベントができるようになったと実感しました。今年で 7 回目の会となりますが、新規参加の方も多かったです。SNS などでこの飲物について目にする機会が日本でも増えてきたからかもしれません。今年は夏が暑く、雨が少なく日差しをたっぷり浴びたせいか、白は甘さが増していて、ロゼは濃い味だと感じたという感想を頂きました。ワインになる前の発酵途中のワインであるフェーダーヴァイサーは、今年も喉ごし爽やかでフルーティでとても美味しく、参加者も次々に杯を重ねていました。（菊池 菜穂子）

会員懇談会サロン「ミノックスカメラの歴史・技術とその魅力」

11/27 ㈪　18:00 ～ 19:30

日独協会事務所内セミナールーム

Mitgliedersalon

Geschichte und Technik der Minox-Kameras und ihre Attraktivität.

Datum: Mo., 27. 11. 23, 18.00-19.30

Ort: Seminarraum der JDG

講師：前川泰久様（元本田技研工業勤務、現在とちぎ日独協会副会長、日本ミノックスクラブ編集長）

参加者 9 名。ラトビアという小国から誕生したドイツ製の超小型・高性能精密カメラ「ミノックス」の魅力についての講演。多数の実機やアクセサリーも見せていただき

ながら、歴史を含め沢山お聞きすることが出来た。スパイ映画で有名だが、エリザベス女王も愛用。細長い棒状のカメラボディは精密な金属製。ドイツ人の徹底したこだわりが随所に見て取れる名機。今でも古さを感じさせないスタイリング。文献の複写に不可欠な高い近接撮影能力も重宝されていた。2000 年まで多くのモデルを販売したが、デジタル化の流れとともに製造中止となってしまった。製造が終了しても、ドイツミノックスクラブという愛好家組織があり、日本ミノックスクラブとの日独交流がある。講師の前川氏が「家電を磨く人はいないが、カメラや車は磨いて持っていたくなる商品で、道具を越えた魅力がある」と仰っておられたのが印象的でした。（木田 宏海）

会員懇談会サロン「シーボルト研究の現在 ーシーボルト来日 200 周年をむかえて」

12/8 ㈮　18:00 ～ 19:30
日独協会事務所内セミナールーム
Mitgliedersalom : Siebold-Forschung heute
Datum: Fr., 8. 12. 23, 18.00-19.30
Ort: Seminarraum der JDG
講師：堅田智子（関西学院大学教育学部助教）

先ず講師は全体を俯瞰し、子世代を含めてシーボルト家研究の内容を話され、更にご専門の日独関係史の観点から、獨逸学協会や独日協会の前身である和独会と今回の講演の中心人物であるフィリップ・フォン・シーボルトの長男アレキサンダー・フォン・シーボルトと和独会の関係についても触れられた。講師のシーボルト家との出会いは、小学校 3 年 8 歳の時。厳父に連れられて 1996 年に訪れた江戸東京博物館のフィリップの生誕 200 年記念展「シーボルト父子の見た日本」が契機となり、その後、日独関係史、広報文化外交を専門として研究を続けられている。馴染みのない専門用語だが、アレクサンダーが外交官人生を賭して取り組んだのが広報外交であった。その中でアレクサンダーの外交理念を明らかにするとともに、〈視覚〉による広報と〈文字〉による広報を駆使し、アレクサンダーが諸外国に発信しようとした日本イメージがいかなるものだったかを研究されている。

一方で「シーボルト研究は終わりのない物語」と言われる如く、史料が日本、ドイツ、オランダ、オーストリア各国に分散し、質量ともに豊富で手間がかかることから次世代のシーボルト研究者の育成が必要となっている。堅田先生の懸念はシーボルト研究の灯が消えてしまうことであり、如何にしてシーボルト研究の魅力を若い世代に広めていくか、腐心されている。（佐藤 勝彦）

ドイツ時事問題研究会 第 94 回

12/16 ㈯　15:00 ～ 17:00
Studiengruppe "Deutschland aktuell" (94)
Datum: Sa., 16. 12. 23, 15.00-17.00

当月のトピックスは、①借り入れによる基金の当初目的外利用を決めた連邦予算に対する憲法裁判所の違憲判決、新たな借り入れで 4 年連続となった借金財政、2024 年予算の大幅削減など予算編成の混乱、②連帯を強調し続けるドイツの対イスラエル政策の背景と多面的な見地に立つ政策の必要性を指摘する最近の国内の論調、③2 年ぶりとなった実質賃金の上昇、④これまでの最低となった PISA の成績とその背景などについて報告し、意見交換を行った。とくに、対イスラエル関係ではシュタインマイアー大統領の声明、幅広い議論を求める論調などを紹介、議論を深めた。

「今月のテーマ」では、「困難なドイツの脱中国」と題して新井氏から貿易、直接投資関係の諸データをもとにドイツの対中関係の現状、相互依存関係などについて報告した。また、伊﨑から党費収入を基本とするドイツの政党資金制度について簡単に報告した。（伊﨑 捷治）

シュプラッハトレッフ（日独言語交換会）

12/16 ㈯　19:00 ～ 20:40
Sprachtreff
Datum: Sa., 16. 12. 23, 19.00-20.40

参加者 35 名。2023 年最後の Sprachtreff でした。ドイツと日本のクリスマスやお正月、または他のテーマについて話しました。途中でパソコンやインターネットの問題でいなくなってしまった方もいましたが、面白い会話ができました。来年の研修生も初めて参加してモデレーターとして手伝ってくれました。普段は 8 つのグループですが、今回申し込み人数が多かったので、最初10 グループに分けました。直前キャンセルがあったので、結局 9 つのグループになりました。初めて参加してくれた方もたくさんいました。特に上級の参加者が多かったです。

参加者一人が、前回のアンケートに送信したフィードバックが活用されていることを感謝してくれました。他にもドイツ側からよく「もっと喋りたいので Sprachtreff より長いイベントがあったらいいな」という意見があります。

会の終了後、いつも通りの反省会の後、モデレーターの皆さんでささやかな忘年会をしました。（ダヴィット・マイヤー）

新入会員交流会
～ドイツ（語圏）のお菓子と紅茶を楽しみながら～

12/17 ㈰　15:00 ～ 17:00
日独協会事務所内セミナールーム
Treffen für die neuen Mitglieder
Datum: So., 17. 12. 23, 15.00-17.00
Ort: Seminarraum der JDG

上野理事のご挨拶

新型コロナ感染が拡大した 2020 年以降にご入会の方々にとっては、対面イベントの機会が減少し、会員同士の交流の機会がないまま今に至ってしまった方も多いのでは、との思いから、今回のイベントを企画しました。気軽に、なるべく若い方も参加がしやすいようにと、日曜日のお昼間に設定し、ドイツのケーキと紅茶をいただきながら、会員同士だけでなく、協会役員、スタッフ、ドイツ人研修生とも交流していただきました。

参加者は 15 名、20 ～ 60 代の学生さんから社会人まで、幅広くお越し頂きました。最初は皆さんやや緊張気味だったものの、協会の概要説明と参加者全員の自己紹介の後、

少人数の 3 グループに分かれて約 20 分ごとに席を移動しながら交流していただいたところ、最後には和気あいあいとした楽しい雰囲気で終えることが出来ました。

日曜開催のため若い会員が多く、ドイツ語を学んでいる方や、留学経験がある、ドイツで働いてみたい、サッカーが大好き、ドイツで就業経験がある等、様々なドイツとの関りを知ることが出来、大変興味深かったです。シュプラッハトレフやクリスマスの集いに参加された方々もおられ、まだイベント参加に対して敷居が高く感じて躊躇していた方には、参加者の感想を直接聞けたことで、前向きになっていただけたようです。

スタッフも、イベントでは裏方で忙しく過ごすことが多いので、今回のようにじっくり皆様のお話を伺えたのは、大変貴重な機会となりました。

これをきっかけに、新入会員の皆様には、イベント参加を通じて、積極的に日独交流を楽しんでいただければと思います。（上野 弥生）

独逸塾

12/18(月)　19:00 ～ 21:00

Gesprächskreis: Neuigkeiten aus Deutschland

Datum: Mo., 18. 12. 23, 19.00-21.00

参加人数 23 名。テキストは 2023 年 8 月 5 日のシュピーゲル誌の AfD の批判記事

1. AfD は最近の世論調査で支持率を 20％まで伸ばしており CDU/CSU に迫る勢いである。
2. AfD の政策は反 EU、反移民、反グロバリゼ―ションである。ジェンダー言語、自分たちに不利な公共放送、性的マイノリティの尊重に反対の立場である。
3. AfD はその過激さを公然と表明しており多くの地域で特別なものでなくなった。
4. AfD の内部で穏健派と過激派の対立が先鋭化しているが穏健派が発言権を失いつつある。
5. ドイツでは刑法 130 条でナチスの称賛やヘイトスピーチには 5 年以下の禁固刑が科せられるなど厳しい。
6. 最も極右でナチスを称賛した Höcke 氏のグループ「Der Flügel」は解散に追い込まれた。
7. Metapolitik とは：政治変革のためには、個々や社会の価値観の形成と変革が求められる。特に文化やアイデンティティに焦点を当てそれが政治的にどのような影響を与えるか理解しようとする運動。Höcke 氏らはこの Metapolitik に集中した。
8. 新しい、Münzenmaier のグループは超極右から距離を置こうとするが彼らの候補者はいずれも Höcke 氏の影響を受けており彼の思想はまだまだ AfD 内で生きながらえている。

文中に現れた「inhaltliche Abgrenzung」の解釈をめぐり議論が集中した。なお岡田様より Meta の語源等の言及があった。（森永成一郎）

※会場が書かれていないものはオンライン開催

千客万来　シュタンツェル独日協会連合会会長訪日

柚岡 一明（日独協会常務理事）

2023 年 10 月 31 日にシュタンツェル会長が日立製作所本社を訪れ、東原日独協会連合会会長と会談しました。

両会長は日独交流の現状と今後の展開について話し合い、経済、科学、文化など様々な分野で直面する課題や、両協会の連携の強化について意見を交わしました。

左から、柚岡常務理事、シュタンツェル会長、東原会長、八木副会長

特に日独両国の連合会の連携と交流を深めるために、東原会長はシュタンツェル会長を 2024 年 4 月 19 日 ～ 20 日に徳島県鳴門市で開催予定の全国日独協会連合会総会に招待しました、それに対しシュタンツェル会長は東原会長を 2024 年 10 月 10 日～ 13 日にベルリンで開催予定の日独パートナーシップ会議に招待しました。両会長はこれらの会議への参加について、今後日程調整を行うことで合意しました。

この会談は、両国の連合会の友好と協力を一層促進するという重要な意義を持ちました。

東京ベルリン友好都市提携 30 周年行事の取り組み

柚岡 一明（日独協会常務理事）

東京とベルリンは 1994 年に友好都市提携を結び、これまで両都市は文化、芸術、デザイン、科学技術などの分野で交流を深めてきました。昨年 8 月に駐日ドイツ大使館がベルリン市と連携し、日独関係機関や団体の間での記念行事の実施に向けた情報共有のための委員会が開設されました（ドイツ語名称は Organisationskomitee Städtepartnerschaftsjubiläum Berlin Tokyo 2024）。ベルリン市、ベルリン日独センター、ドイツ大使館、DAAD、在日ドイツ商工会議所、ゲーテ・インステトゥート、公益財団法人日独協会などが参加しています。各機関の取り組みは以下の通りです。

（公財）日独協会は、「日独マンガコンクール展示会」（1 月 23 日～ 28 日）と「日独のマンガと食文化のトークイベント」（1 月 23 日）を開催。ベルリン独日協会との共催事業です。ベルリン市からは、ウェグナー市長がビジネス、科学、文化の代表団とともに 2024 年 5 月に東京を訪れる予定です。ベルリン商工会議所と在日ドイツ商工会議所（東京）がプログラムを主催します。ドイツ大使館は、東京プライドパレード 2024 に参加、大使館外壁展示も行います。また、ベルリンを中心テーマとしたドイツフェスティバルを開催します。 DAAD は、スタートアップや持続的都市プロジェクトに関する講演会の開催を検討しています。

現在、検討中のプログラムも多く、今後会報誌でお知らせいたします。

ベルリン独日協会へのインタビュー

東京の日独協会とベルリン独日協会は2011年からパートナー提携をしています。今回は、ベルリン独日協会の理事、ヴェレーナ・マテルナ博士にお話をお聞きしました。

1．ベルリン独日協会の設立について。

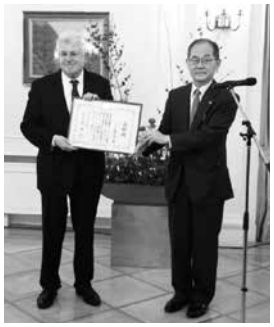

Foto1：2022年、ベルリン独日協会が日本外務大臣賞受賞

明治維新から数年後には、ベルリンにはすでに大勢の日本人留学生がいました。この時代、ドイツ帝国の外交活動や植民地での職務の志願者に語学や専門知識を教えるために王立フリードリヒ・ヴィルヘルム大学に東洋言語セミナーが設けられました。定期的に日本人に会い、日本語会話力を向上させるために、1890年に独日協会（和独会）が設立されました。20世紀初頭には活動を休止するなど紆余曲折の歴史を経て、1952年にベルリン独日協会が活動を再開しました。現在の活動目的は、両国の相互理解と交流を促進することです。

2．ベルリン独日協会の組織構成や会員数について教えてください。会員はどのような関心を持っているのでしょうか？

活動目的、協会の使命、組織構成は、会則によって定められており、協会は公式に登録されています。協会には、正会員、賛助会員、名誉会員がいます。役員は2年ごとに年次総会で新しく選ばれ、会長と副会長2名がトップを務めます。

Foto2：2023年1月に日本大使館で行われたニューイヤーコンサート

協会にとって非常に大事なのが事務局長で、会計主任が積極的にサポートしています。他の役員は、ユース活動、東京の日独協会との協働など、それぞれ特定の分野を担当しています。評議員は協会の更なる発展について助言を行います。現在、約500名いる会員の関心はとても多様です。多くの会員は、文化的な関心を持っていますが、政治、経済、テクノロジーといったテーマも焦点となることがあります。

3．どのような活動が行われていますか？

ベルリン独日協会では毎月たくさんのイベントを行っています。日本大使館やベルリン日独センター、ベルリン市議会と共催するものもあります。様々なテーマを取り上げる講演会、コンサート、レストラン訪問や遠足の他に、東京の日独協会との共催で3回目を迎えたマンガコンクールの展示会やワークショップも行っています。ここ数十年、特定のテーマに関して定期的、集中的に交流するグループが常に存在してきました。その一つとして挙げられるのが、毎週練習し、定期的に公演を行っている合唱団です。音楽は他のイベントでも人々を繋ぎ合わせる役割を果たしています。

Foto3：2023年4月に行われた岡田琢朗氏の講演会「おもてなしの心」

Foto4：2023年12月、ベルリン独日協会合唱団のアドヴェントコンサート

4．2024年は東京とベルリンの友好都市提携30年を迎えますが、何か特別な企画はありますか？

通常の活動を続けつつ、特別な催しも企画しています。友好都市提携25周年の時と同じように、ベルリン市庁舎の格調高い雰囲気の中で一連の講演会が行われる予定です。他の企画に関しても会員や関係者と意見交換を続けています。この記念の年は、協会の枠を越えて独日関係に注目してもらい、異文化交流を促進するための新たな良い機会となると期待しています。

5．ベルリン独日協会と東京の日独協会はパートナー関係に期待することや、やってみたいことはありますか？

ベルリン独日協会と日独協会はすでに長年にわたり緊密に連絡を取り合っており、マンガコンクールなどの共同プロジェクトも実行してきました。2012年からは、日独協会の会報誌「Die Brücke」のコーナー「Berliner Luft」の記事を定期的に送っていますので、読者の皆さんがベルリンを身近に感じてくれていたらうれしいです。逆に、私たちの会報誌「かわら版」に、東京からもご寄稿いただければ大変うれしいです。ベルリンの会員は、日本や東京について知りたいと思っています。ベルリン独日協会と日独協会は2011年に、良好な協力関係を更に深め、友好的な人間関係を築くことを目的にパートナー契約を結びました。この関係を今後も維持し、対面の接触だけでなく、デジタルでの対話の可能性も積極的に活用すべきだと考えています。コロナ禍のために実現できなかった両協会の若者交流も、今後再開したいと考えています。

Foto5：2023年12月、ベルリン市庁舎で行われた漫画コンクール受賞式

6．ベルリンの街の自慢

ベルリンは可能性に溢れた街ですが、それを再び楽しめるようになりました。ここには数多くの博物館があり、新しい博物館も定期的に加わっています。多くの広大な公園、2つの動物園、ベルリンの中心の素晴らしい景色を一望できるテレビ塔のようなユニークな建物もあります。また、ベルリン映画祭、光の祭典、見本市や様々なテーマで行われる会議など、特別なハイライトが1年を通じてあります。ベルリン近郊にも様々な見どころがあります。今後も「Die Brücke」の記事でたくさん紹介していく予定です。

7．東京の日独協会の会員へのメッセージ

あらゆる方法で緊密な関係を続け、人々に独日交流に関心を持ってもらい、二国間の関係が維持されていくよう働きかけていきましょう。私たちは共通の価値観を持ち、似たような社会問題に直面していますが、一緒にたくさんのことを成し遂げることができるでしょう。それを期待しています。

※ 写真はカトリン・スザンネ・シュミット事務局長にご提供いただきました。

Interview mit Frau Dr. Verena Materna von der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Berlin

1. Wann und mit welchem Ziel wurde die Deutsch-Japanische Gesellschaft Berlin gegründet?

Bereits wenige Jahre nach der Meiji-Restauration gab es eine größere Gruppe japanischer Studenten in Berlin. In jener Zeit wurde auch das Seminar für Orientalische Sprachen an der Königlichen Friedrich-Wilhelm-Universität gegründet, um Aspiranten für den Auswärtigen und Kolonialdienst des Deutschen Reiches in Sprachen und Sachfächern auszubilden. Um sich regelmäßig mit Japanern zu treffen und sich in der japanischen Konversation zu vervollkommnen, wurde 1890 die Deutsch-Japanische Gesellschaft (Wa-doku-kai) gegründet. Nach einer wechselvollen Geschichte zu Beginn des 20. Jahrhunderts, in der die Aktivitäten der DJG auch einige Jahre pausieren mussten, nahm die DJG Berlin ihre reguläre Arbeit im Jahr 1952 wieder auf. Wesentliches Ziel ist es heute, das gegenseitige Verständnis und den wechselseitigen Austausch beider Länder zu fördern.

2. Wie sieht die Organisationsstruktur aus und wie viele Mitglieder hat die Deutsch-Japanische Gesellschaft Berlin? Was sind die Interessen der Mitglieder?

Die Ziele, Aufgaben und die Organisationsstruktur wurden in einer Satzung festgehalten und die Gesellschaft ist als Verein offiziell registriert. Es gibt sogenannte ordentliche Mitglieder, Fördermitglieder und Ehrenmitglieder. Der Vorstand wird alle zwei Jahre im Rahmen der jährlich stattfindenden Mitgliederversammlung neu gewählt und von einem Präsidenten und zwei Vize-Präsidenten geleitet. Sehr wichtig für uns ist unsere Geschäftsführerin, die insbesondere tatkräftig von der Schatzmeisterin unterstützt wird. Die weiteren Vorstandsmitglieder kümmern sich thematisch um bestimmte Themen, wie z. B. Jugendarbeit oder Zusammenarbeit mit der JDG Tokio. Die DJG Berlin hat zudem einen Beirat, der den Verein in seiner Weiterentwicklung berät. Aktuell hat die DJG Berlin rund 500 Mitglieder, deren Interessen sehr verschieden sind. Viele Mitglieder sind an kulturellen Themen interessiert, aber auch Politik, Wirtschaft und Technologie können hier Schwerpunkte bilden.

3. Welche Aktivitäten veranstaltet die DJG Berlin?

Die DJG Berlin organisiert in der Regel mehrere Veranstaltungen pro Monat, u. a. auch in Kooperation mit der Botschaft von Japan, dem Japanisch-Deutschen Zentrum Berlin oder der Berliner Senatsverwaltung. Dies sind häufig Vorträge zu wechselnden Themen, Konzerte, Restaurant-Besuche oder Ausflüge, mitunter aber auch Ausstellungen oder Workshops, wie z. B. in Verbindung mit dem alle zwei Jahre stattfindenden Manga-Wettbewerb, der kürzlich zum dritten Mal in Kooperation mit der JDG Tokio durchgeführt wurde. Über die Jahrzehnte gab es immer wieder Gruppen, die sich zu einem Thema regelmäßig intensiver ausgetauscht haben. Besonders zu nennen ist hier der Chor der DJG Berlin, der wöchentlich probt und regelmäßig auftritt. Musik ist auch bei anderen Veranstaltungen oft ein verbindendes Element.

4. Im Jahr 2024 feiern wir 30 Jahre Städtepartnerschaft zwischen Tokio und Berlin. Gibt es besondere Projekte zu diesem Anlass?

Unsere bisherigen Aktivitäten werden wir natürlich im Jubiläumsjahr weiter fortführen, wobei wir auch spezielle Höhepunkte planen. So wird es z. B. – wie schon zum 25-jährigen Jubiläum der Städtepartnerschaft – wieder eine Vortragsreihe geben, die im Berliner Rathaus in repräsentativer Umgebung stattfinden wird. Für die Planung weiterer Veranstaltungen sind wir in stetigem Austausch mit unseren Mitgliedern und Partnern. Wir freuen uns schon auf das Jubiläumsjahr, da es uns wieder die Möglichkeit gibt, auch jenseits unseres Vereins auf die deutsch-japanischen Beziehungen aufmerksam zu machen und das Interesse am interkulturellen Austausch zu fördern.

5. Die Deutsch-Japanische Gesellschaft Berlin hat eine Partnerschaft mit der Japanisch-Deutschen Gesellschaft in Tokio. Was erwarten Sie von dieser Partnerschaft und was möchten Sie in Zukunft gemeinsam machen?

Die DJG Berlin und die JDG Tokio stehen seit vielen Jahren in engem Kontakt und haben auch bereits gemeinsame Projekte durchgeführt, wie z. B. den Manga-Wettbewerb. Seit 2012 bereiten wir regelmäßig für die Rubrik „Berliner Luft“ einen Beitrag für „Die Brücke“ vor und hoffen, damit den Leserinnen und Lesern Berlin ein wenig näher gebracht zu haben. Im Gegenzug haben wir uns auch immer sehr gefreut, wenn wir Beiträge aus Tokio in unserem Vereinsmagazin „Kawaraban“ veröffentlichen konnten. Unsere Mitglieder freuen sich immer sehr über diese Einblicke aus Japan bzw. Tokio. Darüber hinaus hatten die DJG Berlin und die JDG Tokio 2011 einen Partnerschaftsvertrag abgeschlossen mit dem Ziel, die bisherige gute Zusammenarbeit zwischen beiden Gesellschaften zu vertiefen und die freundschaftlichen persönlichen Beziehungen auszubauen. Diesen Weg sollten wir weiter beschreiten und alle Möglichkeiten – persönliche Kontakte, aber auch den Austausch auf digitalem Wege – noch intensiver nutzen. Dazu gehört auch der Jugendaustausch zwischen unseren beiden Gesellschaften, der aufgrund der COVID-19-Pandemie nicht stattfinden konnte und zukünftig unbedingt wieder ermöglicht werden sollte.

6. Was gefällt Ihnen an der Stadt Berlin und was macht ihren Charme aus?

Berlin ist eine Stadt mit vielen Möglichkeiten, die man jetzt wieder intensiv nutzen kann. Wir haben zahlreiche Museen, zu denen regelmäßig neue hinzukommen, viele großflächige Parks, zwei zoologische Gärten und markante Gebäude, wie unseren Fernsehturm, von dem man übrigens einen wundervollen zentralen Blick über Berlin hat. Zu den verschiedenen Jahreszeiten gibt es zudem spezielle Höhepunkte, wie die Berlinale, das Festival of Lights oder auch Messen und Kongresse zu verschiedenen Themen. Auch das Umland Berlins hat viel zu bieten. Da ist sicher für jeden etwas dabei und wir werden in unseren Beiträgen für die „Brücke“ gern weitere Sehenswürdigkeiten vorstellen.

7. Was möchten Sie den Mitgliedern der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Tokio noch mitteilen?

Lassen Sie uns weiter auf allen Wegen intensiv im Kontakt bleiben, damit wir auch andere inspirieren können, sich für den Austausch von Deutschland und Japan zu interessieren und somit die bilateralen Beziehungen lebendig zu halten. Gerade, weil wir gemeinsame Werte teilen und vor ähnlichen gesellschaftlichen Herausforderungen stehen, könnten wir so zusammen viel erreichen. Wir freuen uns darauf!

Foto 1: Preis des Außenministers von Japan für die DJG Berlin 2022
Foto 2: Neujahrskonzert der DJG Berlin 23.01.2023 in der Botschaft von Japan
Foto 3: Vortrag von Takuro Okada zum Thema Omotenashi vom 25.04.2023
Foto 4: Chor der DJG Berlin, Adventskonzert vom 08.12.2023
Foto 5: Preisverleihung zum Manga-Wettbewerb 2023 im Berliner Rathaus am 01.12.2023
Die Fotos wurden freundlicherweise von Frau Katrin-Susanne Schmidt zur Verfügung gestellt.

特別寄稿 Beitrag ❶

ドイツと日本の環境意識

木下 信行（日独協会会員）

差異の所在

近年の世界では、二酸化炭素等のGHG（Greenhouse Effect Gas）排出に伴う気候変動が問題視されているが、その意識には国により差異がある。特に日本については、環境先進国であるドイツと比べ、国民の意識に立ち後れがあるとされてきた。

現在でも、国連等が2021年に行った調査では、企業が環境汚染防止のために行う支払について、ドイツでは66％の人が支持するのに対し日本では42％にすぎず、個別施策の人気度についても、ほぼ全分野でドイツが日本を上回っている。また、2022年のKRC社の調査で気候変動を世界の最重要課題とした者の割合は、ドイツでは33％なのに日本では18％にとどまった。さらに、本年、筆者が排出量取引の導入を訴えた際も、企業の排出規制枠を入札にかけるキャップ＆トレードの仕組みは、世論の支持がない日本では考えられないとされた。

背景

こうしたドイツと日本の差異は、どのような背景によるものであろうか。

差異の要因としてまず指摘されることは、環境団体である。ドイツでは、BUND（環境自然保護連盟）等が活発な活動をしているのに対し、日本では、大きな影響力をもつ環境団体が存在せず、経済団体が近年まで気候変動対策に反対し続けてきたことが目立っている。

また、国政にも違いがある。ドイツでは、かねて緑の党が大きな地位を占めてきたのに対し、日本には、これに匹敵する政党がない。この差異は、法令にも反映している。ドイツの基本法には自然保護責任が記載されており、法律としてもBundes-Klimaschutz-Gesetz（連邦気候保護法）が毎年定められてきた。しかし日本では、憲法に環境に関する規定がなく、ようやく本年、行政府レベルで「GX実現に向けた基本方針」が定められたにすぎない。とりわけ原子力発電については、ドイツではまがりなりにも全廃したのに対し、日本ではむしろ活用していくということで、正反対となっている。

さらに、超国家的な枠組みでは、ドイツは「2045年までにGHG排出ネットゼロ」というNDC（国際公約）を表明しており、EU（欧州連合）は、加盟国の排出規制に基づくETS（排出量取引システム）を20年前から発足させ、現在はCBAM（炭素国境調整制度）の創生に取組んでいる。これに対し、日本は、遅ればせながら昨年、「2050年カーボンニュートラル」を公約し、その為の施策として民間企業によるGXリーグの発足等を始めたばかりである。

こうした背景には、建前と本音の使い分けや政府依存等、日本人特有の気質の影響が指摘されるほか、東アジアでは超国家的枠組みが存在していないこともある。筆者としては、それだけでなく、亜熱帯にすんでいる日本人には気候変動に伴う疾病等の問題が小さいため、危機感が乏しいのではないかと推測している。日本の気候変動対策は、対外的ポーズに過ぎず、日常的な経済活動に根ざすものではなさそうである。

最近の動き

最近はこうした差異に変化がみられるとされることもある。

まず、ウクライナ紛争の影響である。米国に同調したドイツは、ロシアからの天然ガス導入ができなくなり、石炭等による発電に頼らざるをえなくなった。原子力の全廃に異論が出されているという指摘もある。

また、緑の党がショルツ連立政権に参加し、伝統的に環境問題に後ろ向きのFDP（自由民主党）との妥協を余儀なくされていることの跳ね返りもみられる。近年支持を拡大している極右勢力のAfD（ドイツのための選択肢）は、人類によるGHG排出と気候変動の因果関係自体を否認している。

さらに、EUレベルでは、ドイツは、再生エネルギー推進にあたりフランス等の原子力発電に依存しているという見方もあるほか、気候変動問題に敏感な政治勢力と市民の距離が拡大したという報道もある。

ただし、こうした指摘は、いずれも気候変動対策に反対する立場から紹介されていることに留意する必要があり、筆者としては、ドイツが環境先進国であるという基本に変わりがないのではないかとみている。

いずれにせよ、公正で中立的な情報が望まれる。

著者プロフィール：
1954年12月16日　兵庫県西宮市生れ
1977年　東京大学法学部卒業、大蔵省入省（主として現在の金融庁で勤務）
1986年～1989年　ジェトロ・フランクフルト所長
2010年～2014年　日本銀行理事　等
埼玉大学経済学部客員教授、事業再生研究機構理事等兼任
著書・論文等多数（アマゾンに掲示）

シリーズ
ドイツの鉄道

鉄道を通じて振り返るイリス商会の功績　その２

久保　健（鉄道史学会会員　日独協会会員）

歴史の本をめくると、1871年のドイツ帝国成立から第一次世界大戦開戦の1914年までは、長い19世紀、平和な時代、そして戦争の準備がなされた時代と呼ばれているようです。この間には無線通信やディーゼルエンジン、オートバイなど、様々な産業機器が発明されますが、これらは民事用で広まり、やがて軍事へ転用されていきます。ドイツの鉄道の標準軌間1435mmや日本の標準軌間1067mmよりも遙かに狭い、手で持ち運べる600mm軌間の線路を並べた、産業用軽便鉄道（ドイツ語ではFeldbahn）も、その一つと言えるでしょう。今回ご紹介するイリス商会の仕事は、日本陸軍鉄道大隊へ納入した軌間600mmの蒸気機関車「双合機関車」についてです。

■軍事用軽便鉄道のはじまり

産業用軽便鉄道は、1877年にフランスのポール・ドコービル（Paul Decauville）が、自身の農園輸送のために開発、商品化した枕木付のレールや機関車が始まりになります。1880年代初頭にはドイツのメーカーもつづき、地盤が悪く、狭い場所でも簡易に敷設ができる利点を活かし、森林鉄道や鉱山などへ広まります。かねてから兵站を重視し、1890年4月1日に鉄道旅団（Eisenbahnbrigade）を設立するなど、鉄道輸送の拡充を図ってきたドイツ陸軍は、1894年にベルリン近郊に軌間600mm、長さ30kmの演習用環状線を敷設します。そして軍用蒸気機関車の開発にも着手し、クラウス（Krauss）社で1890年に試作された、長さ4mほどの機関車を運転室で背中合わせに連結した、全長8.2mの通称「双子（Zwilling）」を採用します。ドイツの各蒸気機関車メーカーにより、1914年までに2両1セットで454セットが量産され、ドイツ国内における演習（写真1）や、ドイツ領南西アフリカにて使用されています。

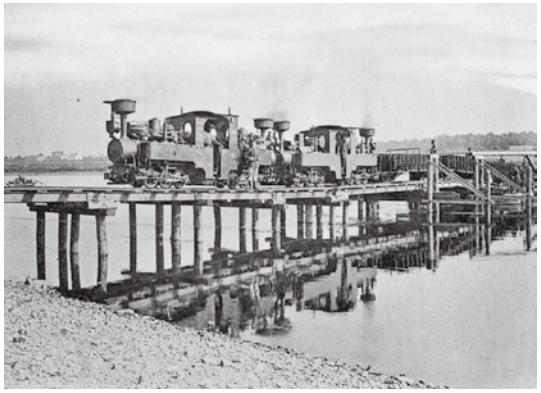

写真１：1909年軍事演習時にエルベ川を渡る双子機関車（Wikiより転載）

■ドイツからの大量輸入

1896年に設立された日本陸軍鉄道大隊は、ドイツ陸軍の軍用軽便鉄道の建設や運転規則を翻訳し、1903年に「軍用軽便鉄道教範草案」を定めます。そしてドイツで採用されていた双子機関車も1901年に5セットが刺賀商会を通じクラウス社から輸入し、「双合機関車」と呼び、日露戦争時に満州で実戦配備されます。そして、さらなる配備が求められる中、1905年にイリス商会へ188セットが発注されます。イリス商会は、ドイツの軽便鉄道材料商だったアルトゥール・コッペル（Arthur Koppel）へ依頼しますが、ドイツでも有数の機関車製造規模を誇る彼の会社オーレンシュタイン・コッペル（Orenstein & Koppel）社でも、短期に製造ができないため、他7社に分散し対応され、1905年末から1906年にかけ日本に到着します。1905年に終戦となった日露戦争には間に合わなかったものの、メーカーによる違いは無く、全て精巧な作りであり、整備状況も優れており、さすがドイツ製と賞賛されたそうです。まさに受注から製造管理を請け負ったイリス商会の面目躍如と言えるでしょう。

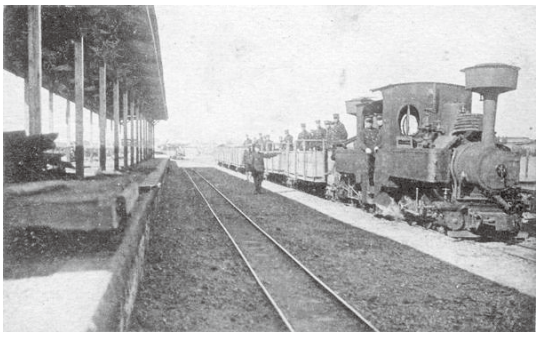

写真２：絵葉書「鉄道連隊第三大隊運転演習」
津田沼駅付近。（習志野市ホームページより転載）

■双合機関車は姿を消しても

日本に輸入された双合機関車の多くは大陸などで使用されましたが、一部は現在の新京成電鉄新京成線へと転用された、鉄道連隊演習線などで運用（写真2）され、終戦をむかえています。西武鉄道など私鉄や炭鉱の専用路線へ払い下げられましたが、現存するものは無いようです。ただイリス二代目社主の写真帳の中に「1907年サハリン」と書き込まれた双合機関車と貨車、敷設工事と思われる場面が捉えられた写真が残されており、2009年にイリス150周年を記念し、横浜美術館で開催された「イリス150周年　近代日本とともに歩み続ける或るドイツ商社の歴史」にて公開されています。当時のイメージを膨らませる貴重な史料として、再度お目にかかれることを願いつつ、この項を終わりにしたく思います。

研修生のコラム

京都と東京の生活

ダヴィット・マイヤー（日独協会研修生）

10 月号の Die Brücke のインタビューを読んだ方は、私が 一年間日本に住んでいたことをすでにご存知でしょう。同志社大学に留学していた時、京都にいました。東京に来てもう３ヶ月ですが、京都の滞在と比べて結構異なります。

京都のアパートから見えた風景

ベランダに遊びに来たカエル

留学当時、京都市の東（東山の方）にある蹴上（けあげ）に住んでいました。アパートは坂の上、森の近くにありました。周りには、同じ建物の住人と数少ない隣人以外ほとんど何もありませんでした。朝には鳥や猫があらわれて、さえずりや鳴き声が聞こえました。ベランダにカエルがいたこともありました。それとは対照的に今のアパートで朝早く聞こえるのは、山手線の音です。都心に住むのには長所と短所が両方あります。駅近くに住んでいるので、早起きしなくてもいいですが、時々、日中家の近くを走る電車、アナウンスやそばを歩く乗客達の騒々しさを無視するのが難しいです。それでも、深夜は電車が来ないのでぐっすり眠れます。留学時には、そのような問題がありませんでしたが、そのかわりに駅まで 10 分も歩かなければいけませんでした。最寄りのコンビニやスーパーはもっと遠かったです！今では考えられないことです。多くの店まで５分もかかりません。でも、将来日本に住む機会があれば、都心から少し離れたところに住んだ方がいいと思います。そのために通勤時間が長くなっても構いません。

たくさんの古い建物や神社仏閣が京都に全く違う雰囲気を与えています。目的なく、ただ通りを歩きながら街の景色を見るのが楽しかったです。東京でもよく散歩しますが、大都会を歩くのはまた違う感じがします。東京が印象的ではないと言うわけではないですが、東京は他の魅力を持っていて、個人的に京都の方が好みです。

東京は、京都やドイツの故郷と比べて忙しく感じますが、そのことにも慣れるかもしれません。

Mein Leben in Kyoto und Tokyo

David Meier (Praktikant der JDG)

Wer das Interview mit mir in der Oktober-Ausgabe gelesen hat, weiß schon, dass ich schon einmal für ein Jahr in Japan gelebt habe. Für mein Auslandsjahr an der Dōshisha Universität war ich nämlich in Kyoto. Jetzt bin ich schon fast drei Monate in Tokyo, und ich muss sagen, mein Aufenthalt in Kyoto war doch ganz anders!

Ich habe damals in Keage gewohnt, was im östlichen Teil von Kyoto liegt, in Richtung Higashiyama. Mein Apartment war auf einem kleinen Hügel direkt neben dem Wald. Um mich herum gab es, außer den anderen Bewohnern und wenigen Nachbarn, fast nichts. Ich konnte morgens also oft Vögel und Katzen sehen und hören. Ich hatte sogar einmal einen Frosch auf dem Balkon! Im Gegensatz dazu ist es jetzt die Yamanote-Linie die ich morgens hören kann. So zentral zu wohnen hat seine Vor- und Nachteile. Mein Weg zum Bahnhof ist sehr kurz und ich kann morgens etwas länger schlafen. Tagsüber ist es manchmal schwierig, die laut vorbeifahrenden Züge, Ansagen am Bahnsteig und vorbeilaufenden Fahrgäste zu ignorieren. Immerhin fahren die Bahnen nachts nichtmehr und ich kann ruhig schlafen. Dieses Problem hatte ich damals nicht, ich musste dafür aber ungefähr 10 Minuten laufen, um zur nächsten Station zu kommen. Zum nächsten Supermarkt oder Konbini war es sogar noch weiter! Das kann ich mir jetzt gar nicht mehr vorstellen. Die vielen Einkaufsmöglichkeiten und Restaurants liegen weniger als 5 Minuten entfernt. Wenn ich in Zukunft die Gelegenheit bekomme, hier zu leben, dann würde ich es wahrscheinlich bevorzugen, etwas außerhalb des Stadtzentrums zu wohnen. Dafür würde ich auch einen etwas längeren Weg zur Arbeit in Kauf nehmen.

Die älteren Häuser und vielen Schreine und Tempel in Kyoto geben der Stadt auch eine ganz andere Atmosphäre. Ich habe es oft genossen, einfach so durch die Straßen zu laufen und mir die Umgebung anzusehen. In Tokyo bin ich zwar auch schon Spazieren gewesen, aber es fühlt sich anders an in der Großstadt unterwegs zu sein. Damit möchte ich nicht sagen, dass Tokyo nicht auch eindrucksvoll ist, allerdings auf eine andere Art, und persönlich gefällt mir Kyoto in dieser Hinsicht besser.

Es fühlt sich alles viel beschäftigter an als in Kyoto oder zu Hause, aber daran gewöhne ich mich wahrscheinlich auch noch.

ドイツ経済の動き　第85回
危機モード

伊崎 捷治（日独協会理事　元ベルリン日独協会副会長　日独協会ドイツ時事問題研究会世話人）

➢➢➢ 最低水準に陥った経済成長

ショルツ首相は年頭のあいさつで「私たちの世界は不穏で荒々しくなりました。まさに息をのむ速さで変化しています」と指摘しました。

中でもドイツにとっては、2023年はとくに多難な年であったといえるでしょう。人材不足とインフレを背景に産業空洞化論が高まり、難民の増加とともに極右政党への支持が高まりました。連立3党は足並みがそろわず、支持率が低落し、経済成長率もOECD諸国の中で最低水準に陥ってしまいました。

➢➢➢ 産業空洞化の懸念

ドイツでは人口の高齢化と大学進学率の上昇を背景に、事務や現場の作業を担う専門職の大幅な不足が続いており、政府は外国からの人材受け入れの促進措置や難民の職業訓練に力を入れていますが、改善の兆しはみられません。

一方で、エネルギー問題ですが、ロシアからの天然ガスや原油の供給停止に対して、政府は供給先の切り替えなどで何とか切り抜けました。しかし、不安を背景にエネルギーほか諸資材の価格が高騰しました。世界でも強い競争力を誇るドイツ産業ですが、昨年は人材不足やコスト上昇など経営環境の悪化を理由に企業が製造拠点を海外に移転してしまい、産業が空洞化するのではないかという懸念が高まりました。これは対応が遅れる政府に対する産業界からの警告でもありました。

➢➢➢ 国民にも広がった不安感

難民の増加も大きな争点となりました。ドイツはウクライナ戦争が始まって以来約117万人の避難民を受け入れていますが、2023年は中東やアフリカからの難民の流入が大幅に増加し、1～11月で約33万人に達し、社会や政治に大きな影響を及ぼしました。有効な流入抑制策がとられないまま市町村の受け入れ施設は難民であふれ、周辺住民の不安が高まりました。

そうした不安に乗じたのが極右政党「ドイツのための（別の）選択肢（AfD）でした。当初は東部ドイツで高い支持を得ていましたが、2023年は西部ドイツのバイエルン州およびヘッセン州の州議会選挙でもそれぞれ社会民主党（SPD）および緑の党を上回って第3党および第2党の座を獲得しました。同党に対する投票の多くは連邦政府に対する批判票でもあったとされ、世論調査の結果では国民が右傾化したためではないとの判断も示されています。AfD自体は右傾化を強めているとみられ、今では東部ドイツ3州で明白な極右政党として憲法擁護庁の監視を受けています。

➢➢➢ 足並みそろわない連立政権

こうした状況の中で、難民の受け入れに前向きで、気候保護を推進したい緑の党、社会保障を充実したい社会民主党、介入を排して健全財政を維持したい自由民主党（FDP）の3党連立政権は足並みがそろわず、多くの対策が妥協の産物となりました。中には、緑の党の経済・気候保護大臣が提出した住宅暖房法案が内容不備で一旦取り下げられたり、FDPの財政大臣が経済活性化法案を提出するのを緑の党の大臣が阻止したりといった事態も生じました。そのため、政府与党に対する支持率は30%あまりにまで低下しました。政府にとって最大の痛手となったのは、2022年にコロナ対策のために借り入れた資金を翌年以降の気候・構造改善に充てようとしたのに対して連邦憲法裁判所から当初の目的外使用として憲法（基本法）違反の判決が下されたことです。

➢➢➢ 求められる地道な改革

不安定な諸情勢を反映して2023年の経済成長率がOECD諸国の中で最低水準の0％前後と低迷する中、2024年予算で計画していた国民の負担軽減や景気浮揚もままならない状況で、大きな改善は見込めません。

唯一ともいえる明るい材料は雇用情勢が安定していることで、働き手の間には良い職場を求めて地域をも超えた転職の動きが活発化していると伝えられます。

ドイツ語協会が選んだ2023年の言葉第1位は「危機モード（Krisenmodus）」。多くの経済研究機関が指摘するように、気候保護、デジタル化、インフラの改善など、改革を着実に進めていくことで危機モードを脱出できるかどうか、2024年はその節目になりそうです。

特別寄稿 Beitrag ❷

南砺市いなみ国際木彫キャンプにボランティアとして参加して

日南田 美幸（日独協会・石川日独協会 会員）

木彫刻が有名な町、富山県南砺市井波町。世界各国から彫刻家を招き1991年から4年に1度開催されているのが、南砺市いなみ国際木彫キャンプです。前回2019年8月、今回2023年8月開催と、コロナ禍に当たらずに開催されました。今回はドイツ、日本のほか、7カ国の作家の方々が参加。それぞれに、楠や檜の原木、丸太が配られ、そこから期間中、野外での公開制作で、思い思いの作品を作ります。木の香りが会場一杯に広がり特別な空間となります。作品の出来を競い合うための「コンクール方式」ではなく、作家と来場者とが、お互いの文化にふれあうことも目的とする「キャンプ方式」となっているのが大きな特徴となっていて、作家の方たちはその観点で選ばれるそうです。

保育園児との交流

プログラムとしては、お茶会、和太鼓などの日本文化体験、来場者と作家さんたちとの交流やワークショップ、参加国の料理を盛り込んだ「世界のおもてなし弁当」の販売など、さまざまなものが用意されています。ちなみにドイツ料理はカリーヴルストとザワークラウトでした。

私は今回が5回目のボランティア参加で、ドイツ・ニーダーザクセン州パイネ出身のミヒャエル・ロフカ(Michael ROFKA)さんを2日間担当し、アシスタントおよびマスコミや来場者とのパイプ役として活動しました。

ミヒャエルさんは約20カ国でこのようなキャンプに参加されたそうですが、いなみのようにボランティアが付いて交流もポイントに置いているイベントは珍しいようです。彫刻をしているときの表情は真剣そのものですが、来場者や子どもたちとの会話ではいつもやさしい笑顔で、快く接してくださいました。また、ミヒャエルさんは同じ芸術家である奥様と参加されており、日本文化や日本語も勉強しておられ、今回このキャンプでインスピレーションを得て、新しい作品ができることを楽しみにしています。キャンプでは、ことばが通じなくても道具（チェンソーなど）は以心伝心で使い方が伝わり、芸術にはことばがいらないことを実感しました。

制作中のミヒャエルさん

一番印象的だったことは、子供たちとの交流です。地元の保育園児、小学生が見学に訪れ、中学生、高校生はボランティアとして活動していました。中にドイツが好きな高校生がいて、話しかけてきてくれて、とても嬉しく、将来が楽しみに思いました。

芸術の世界では、Artist in Residence プログラムがあります。昨今外国から多くの方々が観光に訪れたりするようになりましたが、実際に一緒に体験したり、交流したりすること（特に小さい時から）の大切さを感じました。大人は意識して子供たちにそういう機会を与えるようにすることが大切だと思います。

令和6年1月1日に起きた能登半島地震では、地震発生の1時間後にはミヒャエルさんからお見舞いのメッセージをいただき、人と人との繋がりを感じました。

編集後記

■能登半島地震により犠牲になられた方々に心よりお悔やみ申し上げます。そして、被害に遭われたみなさまにお見舞い申し上げます。
およそ100年前、生涯において最も困難な時期にヘッセは『シッダールタ』を上梓しました。家庭は崩壊し瀕し、経済的に追い詰められ、作家としても闇の中をさまよう状態でした。そんなヘッセを勇気づけたのは、従弟であるヴィルヘルム・グンデルトとの再会でした。日本学者であり東京や新潟に暮らしたグンデルトは、アジアの精神を共有し語り合えるかけがえのない存在でした。悩み、友と別れ、家族を失い、生き続けたその先で、シッダールタは世界と一つになり旅立ちます――かつて離別した友・ゴーヴィンダに見守られながら。困難の只中にあっても、いつでも傍らには相手を想う友がいるのです。(田)

■編集後記を書いている1月半ば、ドイツの報道で連日「Remigration」という言葉を耳にする。2023年のワースト流行語大賞にも選ばれたらしい。元は学術用語だが、現在は極右派の間で「移民の背景を持つ人々の、ルーツがある（と思われる）国への送還」の意味で使われ、2023年11月にAfDの一部政治家と極右活動家、企業家など（CDU保守派も1人）が参加した会合の議題だったとのこと。今年はAfDの支持率が30%を超えている東部の3州で選挙がある。報道が正しいとすれば、何ともきな臭い。(小)

次は、Die Brücke 4月号（4月1日発行予定）のお届けとなります。

Die Brücke 架け橋
日独協会機関紙「Die Brücke 架け橋」第734号　2024年2月1日発行／隔月刊
編集責任：柚岡一明（編集長）公益財団法人日独協会
jdg@jdg.or.jp ／電話：03-5368-2326 ／ FAX：03-5368-2065 ／ http://www.jdg.or.jp
住　所：〒160-0016 東京都新宿区信濃町18-39（マヤ信濃町2番館）／印刷・製本：三和印刷株式会社
禁 無断転載

HITACHI
Inspire the Next

Hitachi Social Innovation is
POWERING GOOD

ひとりの思いにこたえるインフラを、世界中へ。

地球環境を守りながら、豊かな暮らしを実現するために。
日立は、デジタルとグリーンテクノロジーで、
一人ひとりが未来への行動を選べるインフラをつくり、
サステナブルな社会をめざします。

「The Bridge 架け橋」第七三四号 令和6年2月1日発行（隔月刊）公益財団法人 日独協会 定価一部三百円